

ばそれぞれ絵として楽しむことができる。しかしながら、せっかく購入するのであれば九枚全て揃った全図が欲しいと、購入者ならば思うのではないだろうか。どこかひとセットでも三枚続を入手していたならば、残りの六枚も手に入れた全図揃えたい、と購入意欲をそそるような仕組みになっているように、筆者は感じるのである。

検閲月が異なることから、後から出された三枚続二点とあわせ、後付けされるような形で九枚続の作品となったことが改印からわかってきた。なお、背景に描かれた千曲川の描写については、右三枚と左三枚を繋ぐにあたり、少々不自然な川の流れになっているように感じるが、鉄砲から吹き上がる砲煙の描写なども用いてうまく画面を繋いでいる。当初は九枚続となることが予定されていたことが、こうした画面の歪さからも感じられるのである。

さて本作の作者である歌川貞秀は、ほかにも大画面の作例を残している。次項において貞秀が描いた他の大画面作品、とりわけ横浜絵に見られる画面表現について見ていきたい。

二、貞秀の横浜絵

歌川貞秀は、江戸時代末期から明治初期にかけて活躍した浮世絵師のひとりである。富士山に登ったことがあり、この経験から俯瞰図を得意とするようになったといわれている¹⁰⁾。とりわけ、開港以降発展する横浜の風景を描いた横浜絵を得意としたことで知られ、多くの作例を残している。

横浜絵の多くは大判錦絵三枚続であり、幕末から明治期にかけて発展し変わりゆく横浜の様子を、上空から俯瞰的に捉えた構図をしているものが多い。ただし、なかには三枚以上大判サイズの錦絵を繋ぎ、さらに大きな画面で表したものもある。例えば、貞秀の「東海道名所之内 横浜風景」(図5)という、横

浜道が始まる芝生村しばうから海岸沿いに本牧までの様子が表された、大判錦絵八枚続の作品もそのひとつである。この作品は大判錦絵を縦ではなく横に繋げた珍しい作品であるが、さらにその長さが飛び抜けている。なんと大判錦絵を横に八枚繋げ、全長は二メートルを超えるのである¹¹⁾。

なお本作は八枚続であるが、一点ずつ「東海道名所之内 横浜風景」の題目が入れられ、一枚でも成立するような形になっている。また、作画がなされた部分についても大判サイズをフルに使用して描くのではなく、枠をつけ、一点ずつ独立した形としている。なお、改印や判元印も絵を縁取る枠の外側に捺されているため、絵の中に改印はいつさい見られない(図6)。

本作に描かれている横浜の情景をもう少し詳しく見ていきたい。先述した横浜道というのは、横浜開港に合わせて安政六年に開削された横浜町と芝生村の東海道とを結ぶ、新たに設けられた道のことである。本作においては画面左端に芝生村が配されているが、そこからスタートし、左から三枚目に描かれた吉田橋を渡り開港場に入るまでの道がそれにあたる。なお、本作の一番右に描かれている十二天ノ社とは、本牧神社(旧称…本牧十二天社)のことであり、『江戸名所図会』などにも描かれている。

さて、本作における改印である。港町と遊郭のある港崎町みなとさきが表された右から四・五・六枚目は「申二改」の文字を有する年月改三字の単印が見られることから、万延元年(一八六〇)二月に検閲を受けたことがわかる。しかしながら、その他の錦絵については「申三改」の印であり、翌三月の検閲になっている。よって、「甲越川中嶋大合戦図」と同じく、続き物ではありながら検閲月が異なる作例であることがわかる。

おそらく、まず当時横浜の中心地となっていた港と港崎町について大判三枚で描き出し、その後そこから右に二枚、左に三枚と横浜の風景を描き足して、長い構図の錦絵としたのではないだろうか。なお、タイトルに「東海道名所之内」

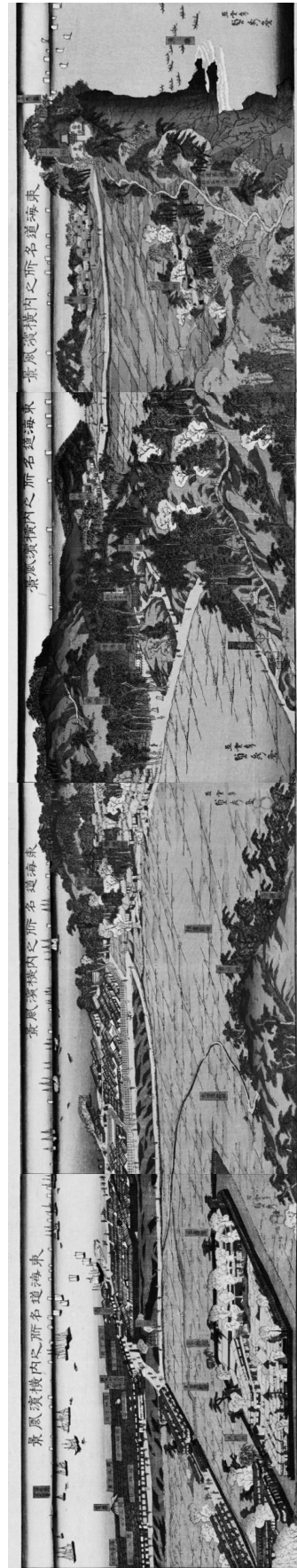
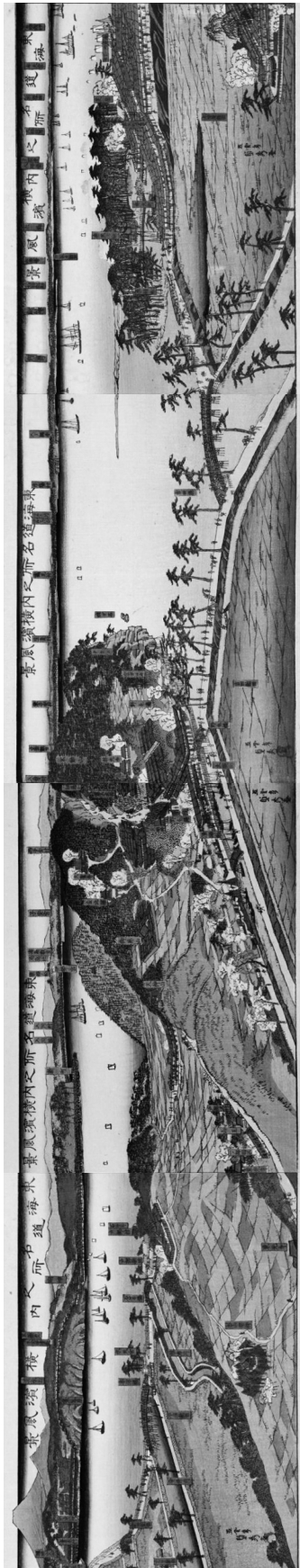


图5 歌川貞秀筆「東海道名所之内 横浜風景」(神奈川県立歴史博物館蔵)

と入っているが、東海道自体は海の向こう側であり、「川崎」など宿場の名前も、左から四枚目の錦絵左手奥のほうに確認できる。東海道をモチーフとした錦絵は数多く生み出されているが、本作については、東海道はあくまで背景であり、大きく発展していく横浜の姿を主役としているのである。

一枚ずつでも独立するような形にはなっているが、八枚繋げた姿は大変壮観で見応えがある。よって、「甲越川中嶋大合戦図」と同様、全図集めなくとも成立はするがせっかくならば全て集めて完成させたい、というコレクター心をくすぐる仕様になっていると筆者は考えている。

次に貞秀の作ではないが、二代歌川広重（一八二六～六九）による横浜絵を紹介したい。二代広重は初代歌川広重（一七九七～一八五八）の門人で、初代



図6 「東海道名所之内 横浜風景」(部分図)
(神奈川県立歴史博物館蔵)



図7 二代歌川広重筆「横濱海岸図会」「神奈川横浜港真景」(神奈川県立歴史博物館蔵)